

2016 年度 大阪大学 前期 国語

I 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	35分	酒井邦嘉『科学者という仕事』からの出題。科学について書かれた文章で、入試問題としてはオーソドックスなジャンルからの出題であり、本文の内容はそれほど難しくなかったといえる。 筆者の酒井邦嘉は日本の脳生理学者で、言語を中心とした人間の脳機能のメカニズムについて研究を行っている。著書に、『言語の脳科学―脳はどのようにことを生み出すか』『科学という考え方―アインシュタインの宇宙』などがある。	《出典》でも述べた通り、本文のテーマはオーソドックスなもので、内容の理解に困ることはなかっただろう。ただ、解答要素が見つけない、解答の根拠とすべき範囲がどこかわかりにくいといった解答の書きづらさを感じたかもしれない。問二では、「科学」について述べられた内容から、「客観的」の意味するところを見つけ出すことが求められた。問三では、本文に書かれていることにもとづいて「古い

傾向と対策

についていえることを推測する必要があった。問四では、「進歩」について書かれたバラバラの要素を論理的に組み立てる必要があった。問五では、「意見」と「仮説」の違いについて対比的に考えていく思考が求められた。解答要素を見つけ出すのに時間を使ってしまうと、その分だけ記述内容の論理性などの考察が不十分になる可能性がある。

最初に本文を読むときは、全体の流れをつかむことに集中し、問題を解くためにもう一度読み直すときには、設問の内容を把握したうえで解答のポイントとなりそうなところに注意しながら読むようにすると時間を節約できるだろう。

解答

問一 (1) 倒壊 (2) 心霊 (3) 権威 (4) 雷同 (5) 放棄

問二 目的から現象を解釈する視点を排除し、すべてのできごとを必然的に定める規則として自然法則を仮定して、事実とその不足を補う科学的仮説によってその規則を描写しつつ諸現象を合理的に説明すること。
(93字)

問三 ある仮説が科学的であるとは、検証可能かどうかにかかわらず、その仮説が反証可能であることを意味するが、占いは導かれた仮説の内容を反証することができないという性質をもつから。(85字)

問四 認識にもとづくあるパラダイムのもとで、経験を根拠とする科学的仮説の検証と反証が繰り返されることによって、そのパラダイム自体の变革が達成されるという形で科学が進歩すると筆者は考えている。

(92字)

問五 意見は、実証性が必ずしも考慮されず、その正しさが無批判に認められるものである一方、科学の構成要素である仮説は、実証性を欠いてはならず、その正しさに常に疑いの目が向けられるものであるというように異なる。(101字)

本文解説**段落解説****I 科学とは何か(第1～第5段落)**

科学は、「自由意志があり、偶然に起こっているように思える人間の行動も、実は自然法則によって必然的に定められている」と「仮定している」。そして、「問題となる現象を目的から解釈しよう」と「することは「非科学的」であり、「人間の行動や主観的な心のはたらきを」、「目的から解釈せずに」『客観的に』科学の力で明らかにする」ことは「本当に科学的に難しい問題」なのである。

また、「科学は正しい事実だけを積み上げてできている」というわけではなく、「事実の足りないところを『科学的仮説』で補」っている。建物に例えるなら、「科学が未熟なために、本来必要となるべき鉄骨が欠けているかもしれない」ず、「新しい発見による革命的な一揺れが来たら、いつ倒壊してもおかしくない位」なのである。

II 科学でないもの(第6～第9段落)

このため、『科学が何であるか』を知るには、逆に『科学は何でないか』を理解することも大切である。科学は「合理的」であるから、「理屈に合

わない迷信は科学ではない」。

そこで「古いや心霊現象についてはどうだろうか」という疑問が生まれる。例えば、「お化けや空飛ぶ円盤の存在は、科学的に証明されていない」が、「逆に『お化けが存在しない』ということを確認するのも難しい」。

ポパーは、「反証(間違っていることを証明すること)が可能な理論は科学的であり、反証が不可能な説は非科学的だと考え」ていた。「そもそも、ある理論を裏つける事実があったとしても、たまたまそのような都合の良い事例があったかもしれないので、その理論を『証明』したことはない」。「科学の進歩によって間違っていると修正を受けうるものの方が、はるかに『科学的』であると言える」。だから、反証できない「古い」は非科学的で、反証や修正を受けうる「天気予報」は「科学的」だといえるのである。

III 科学の進歩(第10～第14段落)

「科学の知識は、経験による根拠を必要としない」「アプリオリな知識」と、「経験を根拠としていて反証できる」『アポステリオリな知識』に分けられる。「反証できるアポステリオリな知識しか科学的と認めないならば」、「簡単に証明したり取り下げられたりする理論ばかりが『科学的』ということになってしまい、果たして科学は進歩するのか、という疑問が生ずる」。

実際には、クーンのように、「アポステリオリ」な科学的仮説が「検証と反証をくり返しながら発展していく」なかで、人々の世界観ともいえる「アプリオリ」な「パラダイム」の変革がなされることで「科学が進歩する」のである。

このように、「科学的仮説は検証と反証をくり返しながら発展していく」もので、「科学における仮説の役割は非常に大きい」のである。

IV 科学者の述べる「意見」と「仮説」(第15〜第19段落)

「しかし、科学者が述べる説が、いつも仮説の形を取っているとは限らない。」「科学者の単なる思いつきや予想はあくまでも意見にすぎず、科学的な仮説とは違う」ので、両者を区別する必要がある。

「科学的な仮説に対しては、それが正しいかどうかをまず疑ってみることが、科学的な思考の第一歩であり、「仮説を鵜呑みにしたのでは、科学は始まらない」。一方で、「意見」については、「自分の意見を『われ思う、ゆえに真なり』のように見なす」ということもあり得るが、そのように疑うことを忘れては、「もはや科学者としては終わりである」。「科学にとって実証性こそが命であり、これを失うことは科学を放棄するのに等しい」。「科学的な仮説」と「意見」はまったくの別物であるのに、「仮説と意見の境についての感覚が麻痺してしまう」のは「危険」なことである。

百字要旨

科学は、すべての事象が自然法則に従うという仮定のもとで科学的仮説の検証と反証を繰り返す、時にはパラダイムの転換を伴って発展する。科学において重要な仮説と単なる意見はまったくの別物で、区別が必要である。

(100字)

用語解説

— 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

公理 ①おおよげの道理。一般に通ずる道理。

②証明不可能であるとともに、また証明を必要とせず直接に自明の真として承認され他の命題の前提となる基本命題。

①ある理論領域で仮定される基本前提。

世界観 世界を全体として意味づける見方。人生観よりも包括的。単なる知的把握にとどまらず、より直接的な情意的評価を含む。楽天主義・厭世主義・宗教的世界観・道徳的世界観などの立場がある。

實在論 認識主観から独立な客観的實在を認め、何らかの仕方および程度においてそれは認識され得るとする哲学上の立場。極端な観念論以外のすべての哲学的立場がこれに入る。

鵜呑み 鵜が魚を呑むように、嘔まずに呑み込むこと。まるのみ。

人の言うことなどを、よく検討・理解せずにそのまま採り入れること。

權威 他人を強制し服従させる威力。人に承認と服従の義務を要求する精神的・道徳的・社会的または法的威力。

その道で第一人者と認められている人。大家。

雷同 (雷が響くと物が同時にこの響きに応ずる意) 自分に定見がなくて、みだりに他の説に同意すること。

設問解説

問一

解答 (1) 倒壊 (2) 心霊 (3) 權威 (4) 雷同 (5) 放棄

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

(2)の「霊」という漢字は日常的に書く機会がほとんどないので、できなかつたとしても仕方がないだろう。また(4)の「雷同」は「付和雷同」という四字熟語の形で用いられることの方が多く、馴染みのない用法だったかもしれ

ない。とはいえ「無批判な群集」というワードから、「付和雷同」の「雷同」ではないかと推測すれば解答できただろう。しかし(1)(3)(5)に関しては、授業のノートをとるようなときにも登場する熟語ばかりで、落としてはならない設問である。

問二

解答

目的から現象を解釈する視点を排除し、すべてのできごとを必然的に定める規則として自然法則を仮定して、事実とその不足を補う科学的仮説によってその規則を描写しつつ諸現象を合理的に説明すること。

(93字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I (第1〜第5段落)

解説

「客観的」、「科学」が本文中でどのような意味を持っているかを把握していこう。第3段落の引用部分、「科学的方法の基礎は、自然が客観的な存在であるという原則にある。つまり、諸現象を目的因、いわば《造物主の》計画《から解釈することで《真実の》認識に到達できるという考えを徹頭徹尾、拒否しようということなのである」という部分に注目しよう。「自然が客観的な存在であるという原則」にもとづく「科学的方法」は、「諸現象を目的因、いわば《造物主の》計画《から解釈することで《真実の》認識に到達できるという考えを徹頭徹尾、拒否しよう」としているという。この内容は、筆者の主張ではない引用の部分ではあるが、この部分を「この考えに従えば」と受けて、「問題となる現象を目的から解釈しようとしている」「これを「非科学的」だと筆者はいつている。したがって、筆者はこの引用部分

のモノの考え方を肯定しており、ここでの「客観的」という言葉は、「現象を目的から解釈しない」ということを意味していると判断できる。

次に、「科学」という言葉について考えていこう。第1段落引用部分の「科学研究は、人間の行動を含めて、すべてのできごとが自然法則によって決められているという仮定に基づいているのです」というアインシュタインの言葉を受けて、筆者は「つまり、自由意志があり、偶然に起こっているように思える人間の行動も、実は自然法則によって必然的に定められていると科学は仮定している」と述べている。さらに、第5段落では「科学は正しい事実だけを積み上げてできていると思うかもしれないが、それは真実ではない。実際の科学は、事実の足りないところを『科学的仮説』で補いながら作り上げた構造物である」と、「科学」における「事実」と「仮説」の役割について述べられている。以上から、筆者のいう「科学」は、「すべてのできごとが自然現象によってきめられているという仮定の下で、事実とその不足を補う仮説によって物事を明らかにすること」だとわかる。そして、第6段落にもある通り、このような科学の考え方は「合理的」なのである。

ここで、「事実の足りないところを『科学的仮説』で補うことについて、もう一歩踏み込んで考えてみよう。「仮説」によって事実の不足を補うことができるのは、「自然法則」の仮定があるからこそである。別の言い方をすれば、仮定している「自然法則」に従うように、事実の不足を補う「科学的仮説」が構築され、諸現象が「合理的」に説明されるのである。もし、その「自然法則」がなければ、ある「事実」は偶然の賜物にすぎないかもしれず、それを「仮説」で補うことで「合理的」に説明することはできない。

逆に、「自然法則」に従って「事実」と「科学的仮説」を組み合わせることでなされる「合理的」な説明は、「自然法則」そのものを描き出してもいい。具体的な例で考えてみよう。(重い)鉄球と(軽い)ボールを同じ高さから

同時に落とすという実験を考えた場合を考える。実験の結果として、「二つは同時に地面に落ちた」という「事実」が得られる。ここで、この「事実」は偶然ではなく、「自然法則」によって定められていたという仮定のもとで、「地球上で物体を落とすと、重さにかかわらず一定の加速度で自由落下運動する」という「仮説」が導かれ、事象が説明される。このとき、この「事実」と「仮説」による説明は、物体の落下について定める「自然法則」を描き出してもいることが分かるだろう。つまり、「事実」と「仮説」による諸事象の説明は、「自然法則」の描写と表裏一体の関係にあるのである。

これらの内容を踏まえたとうえで、「客観的に」「科学の力で」ものごとを明らかにするとはどういうことかをまとめればよい。

解答は、「すべてのできごととは自然法則によって必然的に定められているという仮定に基づき、目的から現象を解釈する視点を排除し、事実とその不足を補う科学的仮説によって諸現象を合理的に解明すること。」となる。

《解答要素》

- ① 目的から現象を解釈しようとししない
- ② すべてのできごととは自然法則によって決定しているという仮定
- ③ 事実と事実の不足を補う科学的仮説
- ④ ②にもとづき、③によって「ものごとを合理的に明らかにする

《参照箇所》

- ① 第3段落3文目
- ② 第1段落2文目
- ③ 第5段落2文目
- ④ 第6段落2文目

問三

解答

ある仮説が科学的であるとは、検証可能かどうかにかかわらず、その仮説が反証可能であることを意味するが、占いは導かれた仮説の内容を反証することができないという性質をもつから。(85字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型十一一般化型

解答範囲 II (第6～第9段落)

解説

まず、筆者が何を基準に「科学的」、「非科学的」だと考えているのかをとらえて、それからなぜ筆者が「占い」は「非科学的」であるというのかを考えていこう。

「科学」と「非科学」を区別する基準は、第8段落に述べられている。ここでは、「反証(間違っていることを証明すること)が可能なのは科学的であり、反証が不可能な説は非科学的だと考える。検証ができるかどうかは問わない。」という、K・R・ポパーによる判断基準が示されている。これはあくまでポパーの主張ではあるが、第9段落では、このポパーの主張を受け、筆者は「科学の進歩によって間違っていると修正を受け得るものの方が、はるかに『科学的』であると言える」と、ポパーと同様の主張をしている。したがって、筆者はポパーと同様、「科学的」であるかどうかは「検証可能性」ではなく「反証可能性」で決まり、反証可能な理論が「科学的」、反証不可能な理論が「非科学的」だと考えていることがわかる。

ここで二つの対比構造があることに注意しよう。一つ目は、「科学的」かどうかの判断基準が、「検証可能性」と「反証可能性」のどちらなのかという対比。二つ目は、反証可能なものが「科学的」で、反証不可能なものが「非科学的」だという対比である。この二つの対比を混同してしまわないように

気を付けたい。

これらの内容を踏まえたうえで、「占い」が「非科学的」であると筆者がいう理由を考えていこう。第7段落の傍線部とその直後では、「占い」と「天気予報」という二つの具体例が挙げられており、前者は「非科学的」、後者は「科学的」であると述べられている。「占い」は、ある人の生年月日(十二星座)や手相といった「事実」から未来予測のような「仮説」を導くものであり、その点では過去の気象データから未来の天気という「仮説」を導く「天気予報」と同じである。本文では、「占い」だけがなぜ「非科学的」なのか、はつきりと述べられてはいないが、ここで先ほどおさえたポパーによる判断基準と合わせて考えると、「天気予報」は反証が可能であるから「科学的」で、「占い」は反証が不可能だから「非科学的」なのだということがわかる。その後が続く「お化けや空飛ぶ円盤の存在」という非科学的なものの具体例について、『お化けが存在しない』ということを実証するのも難しい」と、「非科学的」な仮説の反証不可能性について言及していることから、筆者が反証不可能性を理由に「占い」を「非科学的」と考えていることが読み取れる。

ここまでの内容を踏まえて解答を組み立てよう。解答には、「検証可能かどうかにかかわらず、反証可能な仮説が科学的であること」と「占いによる仮説は反証ができないこと」の二つの内容を必ず盛り込まなければならぬ。最終的な解答は、「ある仮説が科学的であるとは、検証可能かどうかにかかわらず、その仮説が反証可能であることを意味するが、占いは導かれた仮説の内容を反証することができないという性質をもつから。」となる。

《解答要素》

- ① 反証可能な仮説が科学的な仮説である

- ② (①の判断には) 検証可能かどうかは無関係である
 ③ 占いが導く仮説は、その内容を反証することができない
 ※解答は、「(③だ) から。」と締めくくることがよい。

《参照箇所》

- ① 第8段落2文目
 ② 第8段落3文目
 ③ 第7段落3文目

問四

解答 認識にもとづくあるパラダイムのもとで、経験を根拠とする科学的仮説の検証と反証が繰り返されることによって、そのパラダイム自体の

変革が達成されるという形で科学が進歩すると筆者は考えている。

(92字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型十一般化形

解答範囲 Ⅲ(第10～第14段落)

解説

傍線部は、「これでは、簡単に証明したり取り下げられたりする理論ばかりが『科学的』ということになってしまい、果たして科学は進歩するのか、という疑問が生ずる」という一文に含まれている。このことから、傍線部は、「簡単に証明したり取り下げられたりする理論ばかりが『科学的』ということになってしま」うという筆者の懸念を表した部分であったことがわかる。さらに、冒頭の「これでは」は、「反証できるアポステリオリな知識しか科学的と認めないならば、ちょっと極端である」を受けている。つまり、「果たして科学は進歩するのか」という疑問は、「反証できるアポステリオリな

知識」だけを科学的であると認めると、「簡単に証明したり取り下げられたりする理論ばかりが「科学的」ということになってしま」い、果たしてそれが「進歩」につながるのか、という筆者の立場を表していると言える。これは、「アポステリオリな知識」だけでなく、「アプリオリな知識」も科学において重要であることを筆者が意識しているからこそその立場だと言える。このことを踏まえて解答を考えていこう。

第12段落の、「科学理論の発展という観点から、アメリカの科学史家のT・S・クーンは、ある一定の期間を代表して手本となるような科学理論(たとえば天動説)を『パラダイム(範例)』と名づけて、新しいパラダイム(例えば地動説)へと世界観が変革しながら科学が進歩するということを、豊富な例をもとに主張した」の部分に注目しよう。ここでは、「パラダイム」が変革しながら科学が進歩するという、クーンの主張が述べられている。

ここで、「パラダイム」とは、「ある一定の期間を代表して手本となるような科学理論」のことであり、これは、「数学の公理」と同様、他の仮説の前提となるような「アプリオリな知識」である。また、「アポステリオリな知識」が、科学的に反証可能で、経験にもとづいた(＝事実の足りないところを補う)「科学的仮説」のことを指していることもおさえておこう。

以上を踏まえたうえで、クーンの主張する科学の発展について、本文で例に出されている天動説・地動説を使って考えてみよう。天動説という「パラダイム」のもとで、観測結果(＝「経験」)にもとづいた天体運動の法則など、多くの「科学的仮説の検証と反証をくり返」す(第14段落)ことによって、ある段階で地動説という新たな「パラダイム」へと転換するという形で、科学は進歩するのである。これを一般化すれば、「あるパラダイムのもとで、科学的仮説の検証と反証が繰り返されることによって、パラダイム自体の変革が達成されること」によって科学が発展する」ということになる。

これはあくまでクーンの主張であるが、筆者自身も「アプリオリな知識」が科学において重要であるという立場をとっており、その筆者の主張を裏付けるように引用されたものであるから、筆者もクーンと同様の考え方をしているとは判断できる。

第12段落をよく読むと、「パラダイム」の変革が「世界観」の変革であるということが読み取れる。「世界観」とは、「世界をどう意味づけて見るか」という「認識」にかかわる問題である。第13段落では、「認識についての哲学」がいくつか例示されている。そこでのヒュームやヴィトゲンシュタインの考えによれば、「認識」は「経験」にもとづくのである。言い方を変えれば、「経験」は「認識」に影響を及ぼしうることである。つまり、一見「パラダイム(世界観・認識)」に従うのみであるかに見える「科学的仮説(経験を根拠にしている)」が、ひるがえって「パラダイム」に影響を及ぼすことができるのである。この内容は、「科学的仮説の検証・反証によって、パラダイムの変革がなされる」という筆者の主張を裏付ける役割を果たしている。解答においても、『経験』が「認識」に影響を及ぼす」という内容を踏まえて作成したい。

以上の内容をまとめると、最終的な解答は「認識にもとづくあるパラダイムのもとで、経験を根拠とする科学的仮説の検証と反証が繰り返されることによって、そのパラダイム自体の変革が達成されるという形で科学が進歩すると筆者は考えている。」となる。

《解答要素》

- ① 「アプリオリな知識」＝「認識にもとづくパラダイム」
- ② 「アポステリオリな知識」＝「経験を根拠とする科学的仮説」
- ③ ①のもとで、②の検証と反証が繰り返される

④ ③によって、①の変革が達成されることで科学が進歩する
※解答は「③④」と(筆者は)考えている。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第10段落1文目、第12段落1文目
- ② 第10段落1文目
- ③ 第14段落1文目
- ④ 第12段落1文目、第13段落2文目

問五

解答 意見は、実証性が必ずしも考慮されず、その正しさが無批判に認められるものである一方、科学の構成要素である仮説は、実証性を欠いてはならず、その正しさに常に疑いの目が向けられるものであるというように異なる。(101字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 IV (第15～19段落)

解説

『意見』と『仮説』はどう違うのか」を説明するという設問なので、「意見は〇〇だが、仮説は××というように異なる。」と、「意見」と「仮説」の特徴を対比的に表現する方向性で解答を考えていく。「仮説」の特徴については、本文全体で詳しく述べられていたが、この設問ではあくまで「違い」を問われているので、両者の「違い」に絞った解答を書かなければならないことに注意したい。また、ここで話題になっている「仮説」は、傍線部にもあるように「科学的な仮説」を指していることも踏まえておこう。

傍線部より前は、問四で問われているような科学の進歩と「仮説」の関係

性について述べられた部分であるから、傍線部より後の部分に注目する。第16段落では、「仮説」について「科学的な仮説に対しては、それが正しいかどうかをまず疑ってみることが、科学的な思考の第一歩である。仮説を鵜呑みにしたのでは、科学は始まらない」と述べられている。言い方を変えれば、「仮説」は「科学」の構成要素である以上、その正しさに常に疑いの目が向けられるものである。そして、続く第17・18段落では「疑うこと」についての寺田寅彦とデカルトの文章が引用され、筆者の主張が補強されている。

一方、「意見」については、第19段落ではじめてその特徴について述べられる。「自分の意見を『われ思う、ゆえに真なり』のように見なすようになったら、もはや科学者としては終わりである」という部分から、「意見」はその意見を述べた人自身が、無批判に正しいと認めうるものであることが分かる。これは、科学的思考の起点として、その正しさが疑われる「仮説」とは大きく異なる特徴である。

また、「科学にとって実証性こそが命であり、これを失うことは科学を放棄するのに等しい」という次の一文から、科学においては「実証性」が重視されるといふ内容も読み取れる。ここで、筆者が傍線部で「科学的でない」意見」と「科学的な仮説」を対比していたことを思い出そう。「科学」の構成要素である「仮説」は、「実証性」が不可欠であるのに対し、科学的でない「意見」は、必ずしも「実証性」が考慮されているわけではないのだとわかる。

以上の内容をまとめると、「仮説」と「意見」は、「正しさを疑われるかどうか」「『実証性』が重視されているかどうか」という二つの点で異なっているということになる。したがって、解答は「意見は、実証性が必ずしも考慮されず、その正しさが無批判に認められるものである一方、科学の構成要素

素である仮説は、実証性を欠いてはならず、その正しさに常に疑いの目が向けられるものであるというように異なる。」となる。

《解答要素》

- ① 意見は、実証性が必ずしも考慮されていない
- ② 意見は、その正しさを自身が無批判に受け入れうる
- ③ 仮説は、科学の一部として実証性が不可欠である
- ④ 仮説は、その正しさが常に疑われるものである

《参照箇所》

- ① 第19 段落 1 文目
- ② 第19 段落 2 文目
- ③ 第19 段落 2 文目
- ④ 第16 段落 1 文目

(小島朋朗、森慎太郎、正木僚)

2016年度 大阪大学 前期 国語

Ⅱ 小説

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	35分	佐藤泰志『海炭市叙景』からの出題。佐藤泰志は北海道函館市出身の作家。芥川賞候補に五度選ばれたものの、受賞を果たすことはなかった。代表的な著作に、『きみの鳥はうたえる』『そのみにて光輝く』などがある。 この『海炭市叙景』は、「海炭市」という架空の街に住む人々を描いた短編小説集。著者の出身である函館市が「海炭市」のモデルになっているといわれている。この『海炭市叙景』は、全部で三十六篇の短編からなる作品となる構想であったが、十八編執筆されたところで作者が自ら命を絶ち、その構想は実現されなまま終わった。本問は、その最初の短編である「まだ若い廃墟」の一部から出題された。	本文の内容、表現ともに比較的易しいレベルだったといえるだろう。主人公の年齢が受験生に近く、その分感情移入してしまう危険性があることに注意して読解を進められたらどうか。また、各設問のレベルは標準的だと思われるが、小説の問題特有の「クセ」が感じられる問題が多く、評論文

傾向と対策

の対策をただただでは完全な解答を書くのは難しかったと思われる。

問一では、小説の具体的な情景描写を簡潔にまとめることが求められた。問二では、直感的にわかるような内容を、本文にもとづいて客観的に説明することが求められた。問三では、「わたし」がなぜ傍線部のような考え方に至ったのか、本文全体を踏まえて考えなければならなかった。問四は、本文中には書かれていないが、本文を踏まえれば推測できる範囲で解答を書かねばならず、繊細さが要求された。

小説の問題は「本文に書かれていることしか解答に使ってはいけない」という大原則を外れることが多々ある。阪大の第二問では小説が出題されることが多いが、そのほとんどが記述問題で、慣れないうちは「さじ加減」に苦労すると思われる。対策として、センター試験の小説問題を記述の練習問題として使うことなどが考えられる。登場人物の心情について、どのような内容をどの程度まで本文から「読み取って」いいのかということを意識して普段から努力することで、自分で解答を書くときのコツがつかめるだろう。

解答

問一 下山に時間がかかり過ぎている兄の身に、何か異変があったのかもしれないと不安に思う気持ちをかき消すような、大好きで信頼できる兄が普段通りの様子で無事に帰って来て、自分と楽しく会話する姿の想像。(95字)

問二 兄は予想以上に下山に時間がかかっており、自分を不安から守るため

兄の言葉を信じ続けるのは問題の先送りにすぎず、一刻も早く兄を探し出すための行動を起こすべきだと理性的には理解しているのに、奇妙にも自分の心は兄を待ち続けることを選んでいるから。(119字)

問三 夜景を見るという観光目的で自分たちの街に来る人は夜景を作り出す街の住人の生活には無関心だと思われるが、将来性のない街で厳しい家庭環境の中生き抜くという経験を通して、境遇が異なる人は異なる見方をするものだと思っているから。(115字)

問四 初日の出を見に行くまでの幸せな時間を振り返ると、苦しい生活を兄とともに生き抜いてきた二十一年間と、かけがえない兄を失うかもしれない不安に満ちた下山後の六時間は不連続でまったく異なる時間に見えるから。(100字)

本文解説

段落解説

I 「兄」の下山を待つ「わたし」(第1～第6段落)

「わたし」は、「まるでそれが、わたしの人生の唯一の目的のように」「ただひたすら兄の下山を待ち続けた」「わたしの知っている兄」がいつも通りの様子で帰ってきて、「雪まみれ」で、「こえ」ながらも、「あの明るい笑顔がひよっこりあらわれる」、そんな兄の姿が「わたし」の「眼に浮か」んだ。

「ロープウェイの売店の少女」と「チケット売り場の中年の顔色の悪い女」は、「わたし」に「薄気味悪い動物でも見るように、時々、そわそわした視線を向け」ている。「待合室がにぎわったのは、夜明け前と昼すぎの下りのロープウェイの到着まで」で、「わたしたちと共に、初日の出を眺めるため

に、海峡に突きでた、たった三百八十九メートルの山に登った人々は、もうすべて家へ帰ってしま」い、「今頃はあらためて、温かい部屋で新年を祝っている」と思われるが、「わたし」は「うらやんでは「おらず、彼らが「わたしたちとは違うというだけ」だと思っている。この日は「元旦」であり、「わたしだけが、うすら寒いベンチに坐っているのは」「さぞ異様に思えたに違いない」が、「わたし」にとっては「そんなこともどうでもいいこと」なのであった。「わたし」はこれまでの「二十一年間」の人生で、「他人が見れば、たとえなんであれ、どんなふうにも見えるものだ」ということを「たっぷりと学んだ」。むしろ、「わたしは自分の心にあきれていた」。「俺は歩いて下山する、子供の時から歩きなれた山だ、一時間かそこらあれば会える」と「自信に満ちた声で兄はいった」が、「それから何時間かたって、もしかしたら、とんでもない異変が起きたのではないかと気づいたのに、まだわたしは待っている」のである。

II 山に初日の出を見に行くに至った経緯(第7～第17段落)

「初日の出を見に山へ行こう、と最初にいいたのは兄だった。」「いいわね、とわたしは本心で答えた。」「すぐふたりで、六畳ひと間のアパートの部屋中を捜して、ありったけのお金を集めた。」「全部で二千六百円ほどあって、」「それを畳の上に一ヶ所にまとめ、またわたしたちはそれを眺めて笑いあった。」「兄は、これほど金がないとむしろせいせいするな、と陽気にいった」。

「夏の観光シーズンには、他の土地からたくさんの人たちが夜景を見る目的であわただしくやって来る」が、彼らにとって、「人口三十五万のこの街に住んでいる人々は、その夜景の無数の光のひとつでしかなく、「光がひとつ消えることや、ひとつ増えること」、すなわち街の人々の生活の機微は

設問解説

問一

解答

下山に時間がかかり過ぎている兄の身に、何か異変があったのかもしれないと不安に思う気持ちをかき消すような、大好きで信頼できる兄が普段通りの様子で無事に帰って来て、自分と楽しく会話する姿の想像。(95字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型十一一般化型

解答範囲 I (第1～第6段落)

解説

「あれこれ想像する」内容は、第2段落に書かれている。第2段落5～9文目、「ロープウェイの正面玄関のガラス戸に、雪まみれの兄のこごえたくそれが私の知っている兄だ」の部分に注目しよう。この部分から、無事に下山した「兄」がこごえながらも笑顔で「わたし」のもとに帰ってきて、いつものように二人で楽しく会話する様子を想像していることが読み取れる。

ここでポイントとなるのは、「それがわたしの知っている兄だ」の部分である。第6段落2文目から述べられているように、「兄」は、「歩いて下山することを決め」「一時間かそこらあれば会える」と「自信に満ちた声で」言うていたにもかかわらず、何時間も帰ってこない。「わたし」は「もしかしたら、とんでもない異変が起きたのではないかと気づいた」のであった。当然、「わたし」は「兄」のことを心配し、不安に襲われていたと思われる。したがって、ここでは、「それがわたしの知っている兄だ」と自分がよく見知った普段通りの「兄」の無事な姿、自分いつものように楽しくお喋りする様子を想像することで、その不安を振り払おうとしているのだと考えられる。第2段落4文目に、「まだ希望を持っていた」とあることから、「わた

し」にとつてこの「想像」は、不安を払拭するような「希望」であったといえるだろう。

ここで「わたし」と「兄」の関係について、もう少し掘り下げてみよう。「わたし」は、「父」が「ささいな事故のために死んだ」後、「兄弟ふたりだけの生活」を長い間送っていた(第12段落)。そして、第13・第14段落に「兄はたくましく、健康だった。わたしには眩しく見えるほどだった」、「わたしははしやぎながら兄の腕にすがるようにして歩いた」、「わたしはますます腕を絡ませ、身体をぴったり寄せた」とあるように、「わたし」は「兄」のことが大好きで、大きな信頼を寄せていたことがわかる。だからこそ、「わたしの知っている」、普段通りの姿で目の前にあらわれてくれるはずだと信じようとしているのだろう。

したがって、解答は、「下山に時間がかかり過ぎている兄の身に、何か異変があったのかもしれないと不安に思う気持ちをかき消すような、大好きで信頼できる兄が普段通りの様子で無事に帰って来て、自分と楽しく会話する姿の想像。」となる。

《解答要素》

- ① 「兄は下山に時間がかかり過ぎている」
- ② 「(①なので) 兄の身に何か異変があったのかもしれないと気づいた」
- ③ 「大好きで信頼できる兄」
- ④ 「(③が) 普段通りの様子で無事に帰って来る姿を想像する」
- ⑤ 「(③が) 自分と楽しく会話する姿を想像する」
- ⑥ 「(④・⑤は②によってもたらされた) 不安を打ち消すような想像である」

※解答は、「④・⑤の(ような)想像。」と締めくくることが必要。

《参照箇所》

- ① 第6段落2・4文目
- ② 第6段落4文目
- ③ 第13段落1・2文目、第14段落4・7文目
- ④ 第2段落5・9文目
- ⑤ 第2段落6・8文目
- ⑥ 第2段落4文目

問二

解答

兄は予想以上に下山に時間がかかっており、自分を不安から守るため兄の言葉を信じ続けるのは問題の先送りにすぎず、一刻も早く兄を探し出すための行動を起こすべきだと理性的には理解しているのに、奇妙にも自分の心は兄を待ち続けることを選んでいるから。(119字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型十一一般化型

解答範囲 I (第1～第6段落、特に第6段落)

解説

まずは、「自分の心」の内容を把握するために、傍線部直後の第6段落2～7文目に注目しよう。「兄」は明らかに下山に時間がかかり過ぎていて、「わたし」は「とんでもない異変が起きたのではないかと気づいた」が、それでも「兄」のことを「待っている」という「奇妙」で「異様」な「心」というのが「自分の心」の内容であることがわかる。

それでは、なぜ「わたし」がこの「自分の心」に「あきれていた」のかを考えていこう。「とんでもない異変が起きたのではないかと気づいた」のに、それでも「兄」のことをただ「待っている」というのは、一般的に不合理な

行動だといえる。いつまでも帰ってこない「兄」を探し出すために、一刻も早く何らかの行動を起こすべきだろう。

だが、実際に行動を起こしてしまうと、それは、「兄」の身に何か不穏な出来事が起こったことを認めることになる。「兄」の帰りが遅いことへの不安から身を守るために、ただ「兄」の「子供の時から歩きなれた山だ」という「自信に満ちた」言葉をそのまま受け入れ、すがろうとしているのである。とはいえ、これは問題の先送りにすぎない。

待ち続けている「自分の心」を「奇妙」だといっていることから、「わたし」は理性的にはこれらのことをきちんと理解していると考えられるが、その「奇妙な心」は兄を待ち続けることを選んでいるのである。それゆえ、「わたし」は不合理な行動を選び続ける「自分の心」にあきれているのだと考えられる。

解答は、「兄は予想以上に下山に時間がかかっており、自分を不安から守るため兄の言葉を信じ続けるのは問題の先送りにすぎず、一刻も早く兄を探し出すための行動を起こすべきだと理性的には理解しているのに、奇妙にも自分の心は兄を待ち続けることを選んでいるから。」となる。

《解答要素》

- ① 「兄は予想以上に下山に時間がかかっている」
- ② 「兄の言葉を信じ続けるのは問題の先送りにすぎない」
- ③ 「(2)のようにただ信じ続けるのは()自分を不安から守るため」
- ④ 「一刻も早く兄を探し出すための行動を起こすべきである」
- ⑤ 「(2)(3)(4)のようなことは()「わたし」も理性的には理解している」
- ⑥ 「(5)にもかかわらず()「自分の心」は奇妙にも兄を待ち続けることを選んでいる」

※解答は、「①⑥から。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第6段落3・4文目
- ② 第6段落4・5文目
- ④ 第6段落4～6文目
- ⑤ 第6段落5・6文目
- ⑥ 第6段落4文目

問三

解答 夜景を見るという観光目的で自分たちの街に来る人は夜景を作り出す街の住人の生活には無関心だと思われるが、将来性のない街で厳し

い家庭環境の中生き抜くという経験を通して、境遇が異なる人は異なる見方をするものだと思っているから。(115字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型十一一般化型

解答範囲 I・II (第1～17段落)

解説

傍線部中の「それ」は、傍線部直前の「光がひとつ消えることや、ひとつ増えることは、ここを訪れる人にとって、どうでもいいことに違いない」の部分指している。傍線部を含む段落では、「夏の観光シーズンには、他の土地からたくさんの人たちが夜景を見る目的で」やって来ることが説明されている。一方、その「夜景」を作り上げているのは、「この街に住んでいる人々」であり、「この街」で暮らす人たちが明かりを灯すことで「夜景」は生まれる。だが、「他の土地」からやって来る人たちにとって、「この街に住んでいる人々は、その夜景の無数の光のひとつでしかない」、つまり、町の

人々には無関心なのである。このような無関心に対して、冷淡な印象を持つ人もいるかもしれないが、「わたし」は「それを咎めることは誰にもできない」というのである。この理由を考えていこう。

第4段落「わたしたちと共に山に登った人々は、もうすべて家へ帰ってしまった。今頃はあらためて、温かい部屋で新年を祝っているだろう。うらやんではない。わたしたちとは違うというだけだ」、第5段落「確かにわたしだけが、うすら寒いベンチに坐っているのはさぞ異様に思えたに違いない。なにしろ元旦なのだ。でも、そんなこともどうでもいいことだ。他人が見れば、たとえなんであれ、どんなふうにも見えるものだ。二十一年間でそんなことはもう、たつぷりと学んだ」の部分に注目したい。ここで、「わたし」は、境遇が異なる人に感じている隔絶を表明し、境遇が異なり当事者の事情も知らない「他人」は、人それぞれ異なる見方をするものだということを述べている。そして、「二十一年間でそんなことはもう、たつぷりと学んだ」のだという。この「二十一年間」とは、「わたし」のこれまでの人生のことを指しているのだろう。では、その「二十一年間」の「わたし」の人生はどんなものだったのだろうか。

「わたし」が生まれ育った街は、「海と炭鉱」と「造船所と国鉄」しかない街で、「そのどれもが、将来性を失って」いた。「わたし」の父親は鉱夫で、「兄が高校生の時」「ささいな事故のために」亡くなり、母親は「わたしたちが幼かった頃、家を出てしまっ」ていた。そのため、「わたし」は数年間「兄妹ふたりだけ」で生活していた。当然、そのような厳しい家庭環境のもとでは、苦労も少なくなかっただろう。このように、「わたし」は、将来性のない街で、兄との二人暮らしという厳しい生活を送る中で、境遇が異なる人は異なるものを見方するのだと、半ば諦めとも取れるような考え方をしようになったものだと考えられる。つまり、「わたし」にとって、「夜景を見

る目的で「観光にやって来る人たちがその「夜景」を作り出している人々の暮らしに無関心であることは、境遇が異なる以上当然のことであり、よいとか悪いといった評価をすることは「誰にもできない」と考えているのだと思われる。

したがって、解答は、「夜景を見るとという観光目的で自分たちの街に来る人は夜景を作り出す街の住人の生活には無関心だと思われるが、将来性のない街で厳しい家庭環境の中生き抜くという経験を通して、境遇が異なる人は異なる見方をするのだと身に染みて思っているから。」となる。

《解答要素》

- ① 「夜景を見るとという観光目的で自分たちの街に来る人」
- ② 「(①は) 夜景を作り出す街の住人の生活には無関心だと思われる」
- ③ 「将来性のない街で厳しい家庭環境の中生き抜いてきた」
- ④ 「(③)の経験を通して」境遇が異なる人は異なる見方をするのだと身に染みて思っている」

※解答は、「①④から。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第9段落1文目
- ② 第9段落2・3文目
- ③ 第11段落2文目、第12段落全体
- ④ 第4段落5・6文目、第5段落4・5文目

問四

解答 初日の出を見に行くまでの幸せな時間を振り返ると、苦しい生活を兄

とともに生き抜いてきた二十一年間と、かけがえのない兄を失うかも

しれない不安に満ちた下山後の六時間は不連続でまったく異なる時間に見えるから。(100字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要旨把握型十一一般化型

解答範囲 本文全体

解説

まずは、「ふたつの時間」が何を意味しているのかを把握していこう。傍線部は、「わたしはそのふたつの時間を考えたりする」という一文に含まれている。「その」は直前の「二十一年間と六時間」を受けている。したがって、まずはこの「二十一年間と六時間」が具体的にどのような時間を意味しているのかを考えていく。

「六時間」のほうが把握しやすいと思われるので、「六時間」のほうから考えていく。第18段落2文目にある「あと五分で、六時間、わたしはベンチに坐っていたことになる」という表現から、「六時間」というのは、「兄」の下山を待ち続けた時間であることがわかる。この時間で、「わたし」は「兄」に何か不穏な出来事が起こった可能性があることに気づき、不安な気持ちになっていた。

「二十一年間」はこれと対比的なものであると考えられる。第5段落や第16段落と同様、この「二十一年間」とは、「わたし」のこれまでの人生のことである。「わたし」がこれまでの人生を回想している第10～第13段落の内容を踏まえると、その「二十一年間」は、将来性のない街で、厳しい家庭環境の中、「兄」とともに生き抜いてきた時間であったと考えられる。「兄」のことが大好きな「わたし」は、かけがえのない存在である「兄」とともに過ごした時間(＝「二十一年間」と、その「兄」を失うかもしれない不安と恐怖で満ちた時間(＝「六時間」)を対比して、それらを「ふたつの時間」

と呼んでいるのだと考えられる。

さらに、「わたし」がこのような考えを抱いた理由についても触れておきたい。「初日の出を見に山へ行」くという「兄」のアイデアを「わたし」は素晴らしいものとして受け取っており、出発を決心してから登頂するまでに起きたさまざまな出来事を振り返ったとき、「わたし」は「二十一回のわたしの正月のうちで、一番いい正月だと思った」のである。つまり、「わたし」はつい先ほどまで「一番いい正月」の最中にいたといえる。そして、「わたし」は「今でも、そう(＝二十一回のわたしの正月のうちで、一番いい正月だと)思っている」ところが、突如として、「わたし」は大切な「兄」を失うかもしれないという、いわば「どん底」の状態にまで落ちてしまうことになった。「一番いい正月」を体感していた時間のことを思うと、連続した時間であるにもかかわらず、「兄」とともに生きて来た二十一年間と、その「兄」が自分の前から永遠にいなくなってしまうかもしれないという恐怖と隣り合わせで過ごした六時間は、まったく別のものとして感じられたため、「わたし」は「ふたつの時間」と呼んだのだと考えられる。

解答は、「初日の出を見に行くまでの幸せな時間を振り返ると、苦しい生活を兄とともに生き抜いてきた二十一年間と、かけがえない兄を失うかもしれない不安に満ちた下山後の六時間は不連続で全く異なる時間に思えるから。」となる。

《解答要素》

- ① 「初日の出を見に行くまでの幸せな時間を振り返る」
- ② 「苦しい生活を兄とともに生き抜いてきた二十一年間」
- ③ 「かけがえない兄を失うかもしれない不安に満ちた下山後の六時間」
- ④ 「①をしたとき、②と③は」不連続でまったく異なる時間に思える「

※解答は「①④から。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第16段落2文目
- ② 第12段落全体
- ③ 第6段落4文目、第13段落1・2文目、第14段落4・7文目

(小島朋朗、千代田麻理、正木僚)

2016年度 大阪大学 前期 国語

Ⅲ 古文(軍記物語)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	20分	『平家物語』からの出題。鎌倉時代に成立した軍記物語。作者については諸説あるが、未詳である。平家の栄華と没落を描き、平氏の運命を無常観によって説いている。文章は和漢混交文、七五調を主とする律文と散文とを織り交ぜた詩的なもので、国民的叙事詩ともいわれる。本文は、平重盛に仕えた斎藤時頼と横笛の悲恋を描いた章からの引用。	悲恋の果てに出家する・命を落とすという、典型的なストーリー展開で比較的読みやすい文章ではあるが、設問では深い読解力が問われている。正確な単語知識や古典常識は大前提なので、基礎部分でつまずいてしまった人はもう一度見直しておこう。 得点源になりやすい現代語訳問題も、文法知識を応用させたり、文脈を踏まえて訳さなければならなかったりと一筋縄ではいかない。また、時間制限が厳しい一方で、出家後の男女のやり取りだけでなく出家に至る詳細な背景から精読する必要があるの、本文全体を素早く正確に読むこと

傾向と対策

が求められる。
 大学受験で問われる要素が目白押しなので、古文を読み慣れるだけでなく、問題を解き慣れることで、得点力も培っていきこう。

《この解説の使い方》
本文読解 「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか(「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分)や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど(「通読」の★部分)について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使いすぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説
 設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説
 「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識で作れる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

- 解答**
- 問一 (A) 強く (イ) 実に (ウ) 亡き者に
- 問二 (A) 私を捨てるのはいいとしても、出家までしたということの恨めしさよ。

(B) 障子の隙間からのぞいてみると、非常に訪ねかねている横笛の様子が気の毒に思われて、

(C) たとえ一度は強い意志で謝絶できても、また横笛が慕い訪ねてくることがあったら、私の心もきつと揺れ動いてしまおうでしよう。

問三 一つ終わるも知れない短い人生のうち、盛りの二十余年の間に愛する女性に出会えたが、その女性との交際が父の意向に反するならば自分が世を捨てるしかなく、出家するよい契機だと考えたから。

問四 時頼の気持ちは引き留めることができなかつたので、時頼の出家に対してもう恨むことはないという気持ち。

本文読解

前書きの読解

設問は本文を読みながら解いていけばよさそう。

注については、人名がちらほら見えるものの、内容が予想できるようなものはあまりなさそう。「善知識」とあるから、誰かが出家でもするのだろうか。該当箇所に*がついているので、その都度確認しながら本文を読んでいこう。

通読

第1段落第1行〜第2行「高野に年ごとを最愛す。」

◎いろいろな書かれているが、この「聖」が主人公で「齋藤滝口時頼」という名前であることと、その時頼が「横笛」という女性を愛したということをおさえておけばよさそう。横笛は雑仕、時頼とは身分差があるらしい。

第1段落第2行〜第8行「父これを伝ふたりける。」

◎父の発言。読みづらい。「あながちにいさめ」とあるから、父は時頼と横笛の恋愛には反対しているのだろう。「世になきもの」は横笛のことを蔑んだ呼び方か。

◎時頼の発言。「石火の光」は人生のはかなさを表していて、西王母と東方朔は、誰しもがいつかは死ぬということを言うための例にすぎない。なんとなく意味がとれたら先に進んでしまおう。

★男女の仲の話だから、「こゝでの「見る」は「結婚する」の意味。「命」は命令の「命」。誤読しやすいので注意が必要。

◎「これ善知識なり」より前に時頼の出家の理由が述べられているはず。父親に反対されて、横笛を愛することができなくなったから、というのがざっくりとした理由。

第1段落第8行〜第10行「横笛これをうがれゆく。」

◎出家時に剃髪することから、「さまをかふ」で「出家する」という意味だったな。横笛は、何の知らせもなく出家した時頼を憎んで訪ねていくらしい。

第1段落第10行〜第13行「頃はききとらゝ無残なる。」

◎情景描写なので、何となく風景を想像しつつ読み飛ばそう。横笛は、時頼がどの僧坊にいるのかはつきりとはわからないまま訪ねてきたらしい。

第1段落第13行〜第17行「住みあらし〜へりけり。」

◎場面を想像しながら読み進めよう。横笛がさまよっていたところに、時頼

の聲が聞こえてきた。自己願望の終助詞「ばや」に、出家した姿でももう一度会いたいという気持ちが表れている。

◎最愛の女性が訪ねて来たのだから、時頼が思わずのぞき見てしまうのも納得。時頼は「人違いだ」と言って横笛を帰してしまったが、横笛は声の主が時頼だと確信していそうだ。

★古文の指示語はややこしい。場所や人に対して「これ」や「それ」を使うこともよくある。ここでは「これ」は「ここ」、「さる」は「そのような」と訳すとうまく意味が取れる。

第1段落第17行～第20行「滝口入道、くくりけり。」

◎時頼は高野に移ったらしい。冒頭に「高野に〜聖あり」とあったのと繋がりが見えた。横笛も出家したらしい。時頼に面会を謝絶されたからかな。

第1段落第21行～第23行「そのまでは〜心ならねば」

◎和歌部分は設問になっているのでじっくりと読もう。(↓設問解説参照)

第2段落第1行～第3行「横笛はその〜申しける」

◎「はかなくなる」で「死ぬ」という意味だ。横笛は愛する人と別れた悲しみで亡くなった。一方時頼は熱心に修行に励み、高野の聖と呼ばれるようになった。身分の違う女性との恋を反対されて出家するという時頼の不幸も許された。

設問解説

問一

解答 (ア) 強く (イ) 実に (ウ) 亡き者に

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

(ア)

形容動詞「あながちなり」の連用形。程度の強さや、強い意志をもって行動する様子を表す語で、「①強引だ②一途だ」などの意味がある。傍線部は、「いさめければ」を修飾しているため、時頼の父が時頼を厳しくいさめる場面に適する訳を選択する。

(イ)

副詞「よに」は、程度のはなはだしさを表現する語で、「実に・本当に」などと訳す。

(ウ)

「はかなくなる」は、形容詞「はかなし」に動詞「なる」が付いた連語で、「死ぬ・亡くなる」の意味。通常はこの連語の形で覚えておけばよいが、本問では「はかなく」の部分にのみ傍線が引かれているので、解答は「亡く」「亡き者に」などとするのが適当。

問二

解答

《合格答案》

- (A) 私を捨てても、出家までしたということの恨めしさよ。
- (B) 障子の隙間からのぞいてみると、非常に訪ねかねている横笛の様子が気の毒に思われて、
- (C) たとえ一度は心を強く持てても、またも慕うことがあったら、心もきつと揺れ動いてしまうでしょう。

《満点答案》

- (A) 私を捨てるのはいいとしても、出家までしたということの恨めしさよ。
- (B) 障子の隙間からのぞいてみると、非常に訪ねかねている横笛の様子が気の毒に思われて、
- (C) たとえ一度は強い意志で謝絶できても、また横笛が慕い訪ねてくることがあったら、私の心もきつと揺れ動いてしまうでしょう。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

(A) まず現代語訳の軸となるのが、「こそく已然形」の形。この形は、「く」に「く」けれども」と訳す逆接用法である。「さまをかふ」は、「出家する」という意味。出家する際、剃髪して姿が変わることからこのように表現し、「かたちかふ」「かしらおろす」なども同様に「出家する」という意味になる。助動詞「けん(む)は、過去伝聞で解釈。以上をまとめると、「私を捨てて

も、出家までしたという」この恨めしさよ」というような訳になるだろうか。しかし、この訳では逆接が機能しておらず、意味がよくわからない。「私を捨てたこと」と「出家したこと」が対比関係にあり、横笛は「出家したこと」が「うらめし」と言っているのだから、逆に考えれば「私を捨てたこと」はそれほど「うらめし」くはない、ということになる。このように、この逆接が言いたいことを整理して訳すと、「私を捨てるのはいいとしても、出家までしたということの恨めしさよ」となる。

(B) 前半部分はもともと現代語に近いので訳しやすい。古文で「ひま」は、時間・空間的な「隙間」を表すことに注意すると、「障子の隙間からのぞいてみると」となる。後半を訳すのに必要な古文単語は、「けしき」と「いたはし」。「けしき」は「様子・表情」、「いたはし」は「①気の毒だ②愛しい」などの意味がある。この場面は、時頼が訪ねてきた横笛の様子をのぞき見する場面で、ためらっている横笛を見て時頼が抱いた感情が「いたはし」にあたるので、「気の毒だ」という意味で解釈する。後半部分は、「非常に訪ねかねている横笛の様子が気の毒に思われて」となる。

(C) 特に必要な知識はないが、古文独特の表現が多いため現代語に直すのは難しい。文脈からもヒントを探りつつ、各々の表現が何を意味しているのかをはっきりさせ、それらを自然な現代語の言い回しに直すことが求められる。必要に応じて主語も補おう。

文脈から、時頼が、往生院を訪ねてきた横笛を追い返した後、清浄心院へ移ることを決意し、それを同宿の僧に伝える場面だということが読み取れる。

これを踏まえたうえで傍線部を考える。大まかに訳すと、「たとえ一度は心を強く持っても、または慕うことがあったら、心もきつと揺れ動いてしまおうでしょう」となる。このうち、「心を強く持て」「慕うこと」の内容をより具体化する。

「心を強く持て」は、時頼が誘惑に負けず横笛との面会を謝絶したことを意味している。傍線部(B)の直後「いかなる道心者も心弱くなりぬべし」の「心弱く」が正反対の意味で用いられているので、ヒントにしてもよいだろう。

「慕うこと」は、横笛が時頼を慕い訪ねてくることを意味している。出家した時頼がみずから横笛を慕うということは考えにくい。「またも」とあるように、慕うのは一度訪ねてきている横笛の方である。「一度は謝絶できて、また横笛が訪ねてきたら」という流れで文脈にも合う。

「心もはたらく」は、横笛がまた訪ねてきたら時頼は動揺してしまう、という旨がわかるように訳す。

問三

解答

《合格答案》

愛する女性に出会えたのにもかかわらず、父がその女性との交際を反対するので、その想いが実らないならば自分が世を捨てるしかなく、出家するよい契機だと考えたから。

《満点答案》

いつ終わるも知れない短い人生のうち、盛りの二十余年の間に愛する女性に出会えたが、その女性との交際が父の意向に反するならば自分が世を捨てるしかなく、出家するよい契機だと考えたから。

難易度 ★★☆☆

設問パターン 内容説明

解説

「時頼の横笛に対する恋が阻まれたから」という、解答の漠然とした方向性はつかめるだろう。解答は、このことが具体的に記されている部分を抜き出し、現代語に訳してまとめればよい。

時頼自身が「これ、善知識なり」と言っているので、出家の理由は「これ」にあたる内容にちがいない。そして、「これ」が具体的に指示しているのは、時頼の発言の、ここより前の部分「西王母とくに似たり」である。解釈していこう。

「西王母とくには見ず」は伝説をもつ人物を用いた例で、この例で言いたいことは、直後の「老少不定の世のなかは、石火の光にことならず」。「老少不定」の注を参考に、「石火の光」は一瞬で終わってしまうはかない人生の比喩だと解釈しよう。「たとひ人々ば過ぎず。そのうち々余年なり」からは、時頼が現在ちようどこの「二十余年」を生きているというところまで読み取りたい。「夢まぼろしの世のなかに、みにくきものをかた時も見て何かせん」の「夢まぼろしの世のなかに」はやはり人生のはかなさを表現している。「何かせん」は反語で、直訳すると「どうしようというのか、いやどうしようもない」となる。それから、「こ」での「見る」は「結婚する」という意味で、文字通り「見る」わけではないので注意。ここまでの発言を受けて、「おもはしきものを見んとすれば、父の命をそむくに似たり」が直接の出家の原因となっている。「命」は「命令」の「命」。「おもはしき者」は「愛する者」という意味だが、具体的には横笛のことを指している。ここまですべて解釈できれば(現代語訳も参照)、まとめて解答となる。

問四

解答

《合格答案》

時頼の気持ちは引き留めることができないとわかったので、時頼の出家に
対してもう恨むことはないという気持ち。

《満点答案》

時頼の気持ちは引き留めることができないとわかったので、時頼の出家に
対してもう恨むことはないという気持ち。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 和歌

解説

時頼の歌「そるまではうらみしかどもあづさ弓まことの道に入るぞうれし
き」に対する横笛の返歌「そるともなにかうらみんあづさ弓ひきとどむべ
き心ならねば」から心情を読み取る問題だが、そもそも歌自体を正しく解釈
するのに手間取った人も多かったのではないだろうか。難しい単語などはな
いので、主述関係を中心に解説する。

まず両方の歌に詠みこまれている「あづさ弓」だが、これは縁語であり、
歌の内容にはあまり影響を与えていない。時頼の歌の「そる」「入る(射る)」、
横笛の歌の「そる」「ひき」との縁語となっている。最低限の修辞技法の知
識はやはり必要なので確認しておこう。

時頼の歌、本文で何度か「うらめし」という形容詞が出てきたように、恨
んでいたのは横笛。つまり「そるまでくしかども」の主語は横笛。また、こ
の場面で、「まことの道に入る」つまり出家したばかりなのは横笛で、それ
を「うれしき」と言っているのは時頼、という人物関係になっている。訳は

「あなたが尼になるまでは私のことを恨んでいたが、あなたも仏道に入った
と聞いてうれいす」となる。

横笛の歌、「なにかうらみん」は反語なので、前半は「尼になっても恨む
ことはありません」となる。後半は直訳すると「引き留めることができる心
ではないので」となるが、横笛が引き留めることができなかったのは時頼な
ので、この「心」は時頼のもの、と考えるのが自然。以上をまとめればよい。

本文解説

現代語訳

高野に長年のお知り合いである僧がいた。三条の斎藤座衛門大夫以頼の子
で、斎藤滝口時頼と呼ばれた者であった。もともとは小松殿の侍であった。
十三歳の年に、本所へ参上していたが、そこに建礼門院の雑仕で横笛とい
う女がいた。滝口はこの女を最愛した。父はこれを伝え聞いて、「世間に認め
られているような者の婿にしてやり、出仕なども安心してさせてやろうと思
っていたのに、つまらない女を好きになりおって」と、強くいさめたので、
時頼が申したのは、「西王母と申した人も、昔は生きていたが今はいません。

東方朔といった者も、名前だけは聞いても見かけることはありません。年老
いたものと若者のどちらが早く死ぬか分からない世の中など、火打石の火花
に他なりません。たとえ人が長寿であろうと、七十、八十を超えることはあ
りません。そのうち盛りの時期はわずか二十余年だけです。夢まぼろしのよ
うな世の中で、わずかな間でも醜い者と連れ添ってどうしようというのでし
よう。愛する人と連れ添おうとすれば、父上の命に背くことと等しい。これ
は仏道に入る機縁です。そこで、このつらい男女の仲、憂き世はもうたくさ

ん、まことの道を進むことにしましょう」と言って、十九歳の時に、髻を切って、嵯峨の往生院で修行をしていた。横笛はこれを伝え聞いて、「私を捨てるのはいいとしても、出家までしたというこの恨めしさよ。たとえ世を背くとしても、なぜこうこうと知らせてくれなかったのでしょうか。時頼様の決心が強くとも、訪ねて恨み言を申し上げよう」と思って、ある夕方に都を出て、嵯峨の方へとさまよい出る。季節は二月十日過ぎのことで、梅津の里の春風に、よその梅の香りも心地よく、大井河の月明かりも、霞がたちこめてぼんやりとしている。並々ならぬ哀れさも、誰のせいかと思つたことだろう。往生院とは聞いていたけれど、どの僧坊かははっきりと知らないの、あちらこちらでためらい立ち止まり、訪ねかねるのは気の毒である。住荒らした僧坊に、念誦の声が出た。滝口入道の声だと聞き定めて、「私です、ここまで訪ねてまいりました。出家したお姿でも、今一度見申し上げたいのです」と、連れていた女に言わせたところ、滝口入道は胸が少しぎわつて、障子の隙間からのぞいてみると、訪ねかねている横笛の様子が気の毒に思われて、どんな道心者でも心が弱くなることだろう。すぐに人を遣つて、「ここにはそんな人はいない。お間違いでしよう」と言って、とうとう会わずに帰ってしまった。横笛は情けなく恨ましく思ったが、力なく涙をこらえて帰った。滝口入道が同宿の僧に会って申したことに、ここは実に静かで、修行に支障はないのですが、想いがおさまらないまま別れた女にこの住まいを見られてしまいましたからには、たとえ一度は強い意志で謝絶できても、また横笛が慕い訪ねてくるのがあったら私の心もきつと揺れ動いてしまうでしょう。ここを去ろう」と言って、嵯峨を出て、高野山へ登り、清浄心院で修行していた。横笛も出家したと聞いて、滝口入道は一首の歌を贈った。

そるまでは……(あなたが尼になるまでは私のことを恨んでいたが、あ

なたも仏道に入ったと聞いてうれいす)

横笛の返事には、

- ① そるとても……(尼になつても恨むことはありません。あなたの決心はとても引きとめることはできないのですから)

横笛はその思いが積もつたのだろうか、奈良の法花寺にいたが、幾ばくもたたないうちに死んでしまった。滝口入道は、この旨を伝え聞き、ますます深く修行に励んでいたところ、父も不孝を許したという。親しい者たちも皆尊信して、高野の聖と呼び申し上げた。

用語解説

年ごろ 長年・数年

心やすし ①安心だ②親しい

あながちなり【強ちなり】 ①強引だ②一途だ

きこゆ【自ヤ下二】 ①聞こえる②申し上げる

見る【他マ上二】 ①見る②結婚する③会う

うき世 ①無常の世②つらいことの多い男女の仲

おこなひ 仏道修行・勤行

など なぜ

あくがる【自ラ四】 さまよい歩く・歩き回る

やすらふ【休らふ】【自ハ四】 ①ためらう②休む・立ち止まる

具す【他サ四】 伴う・連れる

けしき 様子・表情

いたはし【労し】 ①苦しい②気の毒だ③愛しい

やがて そのまま・すぐに

たがふ【違ふ】【他ハ四】 ①逆らう②間違える

よに 実に・本当に
はかなくなる 死ぬ・亡くなる

(松田朋佳、市川裕圭、山崎恭子)

2016 年度 大阪大学 前期 国語

Ⅳ 漢文（漢代の評論）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★☆☆☆	20分	<p>『風俗通義』は、後漢末の内部情勢が不安定な中で、一般的に信じられていること、俗説の真偽を確かめると同時に、制度や習俗に加えてこの文章で述べられているような民間信仰などを伝えることを目的として応劭が作った書物である。もともとは31巻もあったのだが、その多くが失われてしまい、現存するのは10巻のみである。</p>	<p>字数は156字。河南省のある場所での塩漬けの魚への信仰の成り立ちとその後について述べた文章である。本文の解釈において難しい文法事項は使われておらず、比較的読みやすかったはずだ。また、述べられている内容が信仰の成り立ちとその後、ということでも物語の展開もはっきりしており、論理展開を追いやすい文章であった。</p> <p>問二は例年阪大で出題されている、返り点を白文につけ</p>

傾向と対策

る問題。ここは得点源になるので焦らずしっかりと正解していききたい。問四は傍線部を見るだけではピンとこないだろうが、前後の文脈を捉えることで現代語訳の大きなヒントを得られたはずだ。問五はやや難しい問題で、傍線部と一致するような内容の文章がどこなのかを正確に捉えられたかが正解へのカギとなった。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワンランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文解説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名(作品名を書き下す場合を除く)のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

問一 そのぬし「あるじ・しゆ」いまだゆき(て)とらざるなり「わうしゆせざるなり」。

問二 念^ヒ其^ノ不^ル事^メ

問三 手に入るはずの鹿を見つけることはなく、代わりに塩漬けの魚を見つけた。

問四 どのような神がいるはずだろうか、いや、当然いるはずがない。

問五 鹿が魚に変わったと思ひ込んだ人々がともに魚をあがめることで、本来何もない場所にほこらが立ち物資が集まる。このようにして、物資が集まる所で人々は神を作り上げている、ということ。

本文読解

通読

汝南に田に鹿を得る者有り、

◎注より「汝南」は地名で河南省のこと。

▼河南省に田で鹿を手に入れた人がいた。

^①其主未往取也。

◎傍線部だ！ 「未」がポイントになりそう。問題を解くときに訳は考えよう。

商車十余乗沢中を経て行くに、

◎注より「乗」は車の単位のこと。

▼商売の車が沢中を経て行くと、

☆「沢」は「さわ」とも読むし水っぽいイメージ、田んぼのことかな？

此の鹿の繩に著^つけらるるを望見し、因^よりて持ち去る。

▼鹿が繩につけられているのを見て持ち去った。

^②念其不事、

◎傍線部(2)の問題を見ると、何もしていないのに鹿を手に入れたことを気にして、とある。なるほど。

一鮑魚を持ちて其の処^{ところ}に置く。

◎注より「鮑魚」は塩漬けの魚という意味。

▼塩漬けの魚を持って商売人がそこに置いた。

頃^{しほらく}有り、其の主往^いくに、^③得る所の鹿を見ず、反^{かへ}つて鮑魚を見る。

▼しばらくして最初の主が行くと、得るはずの鹿の代わりに、塩漬けの魚を見た。

沢中は人の道路に非ず、

◎人の道路ってのは人の通る所ってことかな？

▼沢中は人が通らないので、

其の是^かくのごときを怪み、

▼このようであるのを怪しみ、

◎「是」は、鹿の代わりに塩漬けの魚になっていたということを指してい

るのだろう。

大いに以て神と為し、転た相ひ告げ語る。

◎「大いに」の意味は微妙だなあ。たぶん強調の意味だろう。

☆「転た」は漢字「転」のころがつていくイメージから、どんどんという感じなのかなあ。

▼この現象が神としてどんどん互いに告げ語られた。

病を治し福を求むるに、多く効験有り、

▼病を治して福を求めると、多く効果が有ったので、

困りて祀舎を起こし、衆巫數十、帷帳鍾鼓を為す。

◎注より「祀舎」はほころのこと。さらに「帷帳鍾鼓」はとばりやかね、

太鼓のこと。

▼祀舎を起こして仕える人を数十人、とばりやかね、太鼓を用意した。

方数百里皆禱祀に來りて、鮑君神と号す。

▼周り数百里の人皆祈りに来て、鮑君神と呼んだ。

其の後数年、鮑魚の主祠下に來歴し、其の故を尋問して、曰く、

▼その数年後、塩漬けの魚の主がほころに來歴し、その理由を質問して言う
ことには、

「此れ我が魚なり、当に何の神有るべけんや。」と。

◎「当に〜んや」だから、これは反語の文だ！

▼「それは私の魚である。どうして神がいるだろうか、いやいるはずがない。」と。

堂に上りて之を取り、遂に此れより靡る。

◎「之」は魚のことだろう。

▼堂に上って魚を取って、結局この時から信仰が廃れた。

伝に曰く、「物の聚まる所、斯に神有り。」と。

▼言い伝わるころによると「物が集まる所に神はいる。」と。

◎傍線部(5)の意味はまだあいまいだなあ。

言ふころは人の共に契めて之を為すのみとなり。

◎注より「契」はあがめて、お供え物をする事。

▼意味するところは人がともにあがめお供え物をする事、これが為されるということである。

設問解説

問一

解答 そのぬし「あるじ・しゆ」「いまだゆき(て)とらざるなり」「わつしゆせざるなり」。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン ひらがなの書き下し

解説

入試問題として頻出の、再読文字を含んだ書き下しの問題である。最初の

「其主」は3行目初めから、「其の主」。「未」は超重要な再読文字で「未ダくず」と書き下す。意味は「まだくない」。あとは「未ダくず」のかかる動詞の部分がどこまでかを考える必要がある。しかし、かかる動詞の部分を「往」だけと考え「未だ往かず、取るなり。」と書き下すと文自体の意味が通らなくなるので、かかる動詞の部分は「往取」だと考え「往き(て) 取らざるなり。」「往取せざるなり。」と書き下す。

ちなみに現代語訳は、再読文字「未」に注意して訳すと「その人はまだ取りに行っていないかった。」となる。取りに行っていないかったものの内容は捕まえた鹿のことだ。

問二

解答 念^ヒニ其^ノ不^ル事^メ

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 返り点と送り仮名の付与

解説

傍線部(2)の意味は「車の主が、何もしていないのに鹿を手に入れたことを気にして、」と問題文中に提示されており、書き下しも同様に「其の事めざるを念ひ」と提示されている。なんと親切な問題なのだろうか。この書き下しを白文に当てはめていくだけである。「事めざるを念ひ」と読むために返り点として「一レ」点を使うことに注意。

問三

解答 手に入るはずの鹿を見つけないことではなく、代わりに塩漬けの魚を見つ

けた。

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

まず、そのまま傍線部(3)を書き下すと「得る所の鹿を見ず、反つて鮑魚を見る。」となる。「得る」は「手に入れる」という意味で、「所」は「得」が鹿を修飾することを示す単語である。「得る所の鹿」というのは、以前の文脈から河南省の田畑で捕まった鹿のことなので、この傍線部の主語は「鹿を捕まえた人」だとわかり、「手に入るはずの鹿」と訳すと上手に意味がつかない。「反」を「かへッテ」と読む場合は「反対に」という意味になる。「反対に」でも意味が通じないわけではないが、鮑魚と鹿は相対^{あひ}するものではないので「代わりに」と訳するのがベスト。あとは書き下しにもとづいて、塩漬けの魚を見つけた、という訳となる。

問四

解答 どのような神がいるはずだろうか、いや、当然いるはずがない。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

傍線部(4)の書き下しは「当に何の神有るべけんやと。」となる。

まず傍線部(4)前後での文脈をまとめると、

塩漬けの魚の持ち主がほこらを訪ね、ほこらの起源を聞いて「これは私の魚である。当有何神。」と述べ、堂に上つて魚を取ってしまい、その結果信仰が廢れる。

というものである。

たとえ前後の文章の意味が完璧にはわからなかったとしても、文章の流れ

や部分的な意味はわかるはずである。それらは問題を解くうえで決定的な情報になる。ここでは、前後の文脈から傍線部(4)は「私の魚だから神がいるわけがないだろう」のような意味だと推測することができれば、この問題はほぼ解けたも同然なのである。

傍線部(4)の説明に移ろう。「当」は再読文字であり「当然くすべきだ」「当然くだろう」という意味である。それに加えて「くべけんや」という語尾になっているので反語であることもわかる。「何の」は反語の文中では「どのような」という意味となる。これらの文法事項を頭に入れて訳していく。段階的に訳していくとわかりやすい。とりあえず語尾の反語は考えず、また、「何」はそのままの状態で傍線部(4)を訳すと、「当然何の神が有る(＝いる)べきだ」となる。次に、反語と「何」の詳しい意味を加えると「どのような神がいるべきだろうか、いや当然いるべきではない」となる。しかし、これでは日本語として違和感が残る。「くべし」が古文の助動詞「べし」の意味にあるように「くはずだ」という意味もあることを知っていれば「どのような神がいるはずだろうか、いや、当然いないはずだ。」となり、日本語として自然な形に訳すことができる。

問五

解答 鹿が魚に変わったと思ひ込んだ人々がともに魚をあがめることで、本来何もない場所にほこらが立ち物資が集まる。このようにして、物資が集まる所で人々は神を作り上げている、ということ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

このような全体の文章を踏まえての内容説明でもどのように考え始める

かは同じだ。まず、傍線部の前後の文脈をよく確認しながら傍線部の内容を推測しつつ訳していく。この問題では傍線部近くに内容説明の手がかりがあったが、全体の文章を踏まえての場合は傍線部から遠く離れた場所に手がかりが残されている場合もたまにあるので注意が必要である。そのうえで、判明した傍線部の内容が文章全体とどのように関係しているのかを含めながら内容を説明していけばよい。

この問題について考えよう。傍線部(5)をそのまま書き下すと「物の聚まる所、斯に神有り」となり、直訳すると「物の集まる場所、そこに神がいる」となる。

傍線部(5)の前後を見ると、直後に「言ふころは」とある。「言ふころは」は「言ふころは→言うその心は→その言葉の意図は」となり、これに続いて傍線部(5)の意図が説明されているとわかる。続きの「人の共に契めて之を成すのみとなり。」を訳していくと、「契めて」は注から「あがめて、お供え物をする。」という意味。「之」の内容は「人々が一緒にあがめてお供え物をして成す」ものなので、ここでは「神・信仰」を指し、「人が一緒にあがめてお供え物をする」ことで信仰を成すのみである。「ことが傍線部の意図だとわかる。

この意図を踏まえて傍線部(5)を文章の内容に即して解釈していく。この文章内で「物が集まっている」状況を考えていくと、「人々が不思議な話を信じてほこらをたて、とぼりやかね、お供え物が集まった」という部分が当てはまる。次に「ここに神有り」を先ほど当てはまった部分において考えてみると、確かにとぼりやかね、お供え物があるところに信仰が存在しているのである。

実際にはその場所はただ鹿がつながっていただけの場所であり、「鹿が塩漬の魚に変わっていた」というのは通りすがりの商人がたまたま取り替え

てしまったただだった。しかし、一人がそれを不思議に思い、人々の中で噂が広がり、実際には神がいなくて結果的にほこらが作られ、神が作り上げられていったのである。これが傍線部の意味と直後に述べられている意図にびつたりと一致する。このびつたりと一致した文章内のストーリー展開を含めながら傍線部(5)の内容を説明すればよい。

解答の流れは、

① 本来何もなかった場所で鹿が魚に変わったと思った人々がともに魚をあがめる。

② ほこらが立ち物資が集まる。

↑ (このようにして)

③ 物が集まる場所で人々が神を作っている。
 というようになる。

本文解説

第1部 信仰の起源 (2行目「置其処」)

書き下し

汝南に田に鹿を得る者有り、其の主未だ往きて取らざるなり。商車十余乗沢中を經て行くに、此の鹿の繩に著けらるるを望見し、因りて持ち去る。其の事めざるを念ひ、一鮑魚を持ちて其の処に置く。

現代語訳

河南省に田畑で鹿を手に入れた人物がおり、その人物はまだ(鹿を)取りに行かずにいた。ここで、十台余りの商人の車が田畑の近くを通っていき、(車の主が)見渡すと鹿が縄につながれているのを見つけたので鹿を持ち去

った。(車の主は)何もせず鹿を手に入れたことを気にして、一匹の塩漬けの魚を持ってきてその場所に置いた。

第2部 信仰の発生 (2行目「有頃」～5行目「号鮑君神」)

書き下し

頃有り、其の主往くに、得る所の鹿を見ず、反つて鮑魚を見る。沢中は人の道路に非ず、其の是くのごときを怪み、大いに以て神と為し、転た相ひ告げ語る。病を治し福を求むるに、多く効験有り、因りて祀舎を起し、衆巫數十、帷帳、鐘鼓を為す。方数百里皆禱祀に來りて、鮑君神と号す。

現代語訳

しばらくして、(鹿を捕まえた)人が行くと手に入れるはずの鹿を見つけないことはなく、代わりに塩漬けの魚を見つけた。田畑の近くは人が通るような道ではなく、このような状況になっているのを不思議に思い、大げさに(それを)神の仕業としてますます人々に話し、広めた。病の治療や幸福を得ることについて大きな利益があったのでほこらを作り、それに仕える人を数十人集め、とばりやかね、太鼓を用意した。すると、四方数百里にいる人々が皆祈りに来て(その魚を)鮑君神と呼んだ。

第3部 信仰の廃止 (5行目「其後数年」)

書き下し

其の後数年、鮑魚の主祠下に来歴し、其の故を尋問して、曰く、「此れ我が魚なり、当に何の神有るべけんや」と。堂の上りて之を取り、遂に此れより廢る。伝に曰く、「物の聚まる所、斯に神有り」と。言ふところは人の共に契めて之を為すのみとなり。

現代語訳

その数年後、塩漬けの魚の持ち主がほこらのもとに来て、その（ほこらの信仰の）由緒を質問したのち、言うことには、「これは私の魚である。どのような神が（この魚に）いるはずだろうか、いや、当然いるはずがない。」と。（持ち主は）その本堂に行つて魚を取り、結局この時から信仰は廃れた。言い伝えに「物が集まる所に、そこに神がいる。」というものがある。その言葉の意図は、人が一緒にあがめて、お供え物をすることで信仰が生まれるだけだ、ということである。

要旨

捕獲された鹿を横取りした商人が代わりに塩漬けの魚を置いた。本来の持ち主が知らずにそれを見て神の仕業だと伝え、信仰が生まれた。数年後真相がわかり信仰は廃れた。信仰は人々がともにあがめることで生まれる。

(99 字)

【参考】読み物としての漢文

この文章は読んでいてそれなりに面白かったのではないだろうか。勝手に他人が捕らえた鹿を通りすがりの商人が奪っていくのも面白いし、その商人が代わりに塩漬けの魚を置いていくのも、それを人々が信仰し始めるのも面白い。このように真面目な入試問題でも漢文という分野では読んでいて飽きない文章が採用されていることが結構ある（もちろんまったく面白くないものも少し

はあるが）。また、この文章では塩漬けの魚や鹿を縄で捕まえる風習のようにその書かれた当時の中国の文化なども知ることができて、ためになるのだ。さらに、文章の中でいまにも通じる教訓を物語を通じてわかりやすく示してくれているものも多々ある。その教訓を日々に生かせば、Quality of Life も上がる。そうやって漢文というジャンルをまず好意的に見る、好きになっていくことも、若干精神論のような話にはなるが、漢文の問題を解く力をアップさせるはずだ。物語も面白いし、当時の文化も学べるし、それを踏まえて教訓も示してくれるし、それにつれて、漢文を読むむ力もアップしていく。一石四鳥である。ぜひとも、たくさん漢文に触れて、漢文を好きになってほしい。

(竹本有輝、津田智沙、関信成)